

研究発表

## 田山花袋が抱いていた自然のイメージ

Tayama Katai's concepts of nature

Kenneth G. Henshall\*

Tayama Katai often appears to be considered a rather erratic writer who switched melodramatically from romanticism to naturalism to religion. His naturalist writings are similarly often seen as an awkward attempt to amalgamate essentially incompatible elements of subjective romanticism and objective naturalism.

I feel this view of his literature is unkind for two reasons: first, Japanese naturalism was not based upon the pseudo-scientific objective naturalism of France so much as the 'pro-individual, anti-societal' subjective naturalism of Germany, and was therefore not necessarily incompatible with romanticism; and second, while Katai's literature certainly underwent changes, it contains at least two major constants, namely his attempt to relate his literature to his own life, and his reverential respect for nature.

It is the latter that I would like to concentrate on in this paper, and I hope to show that the changes in his literature can

---

\* Kenneth G. Henshall オークランド大学准教授

largely be attributed to modifications of his conceptual model of nature, sometimes resulting from his own experiences but often from the influence of Western literature and philosophy. Though the concept of it changed, the object itself—nature—was always present at the core of Katai's literature, and I therefore feel that it is more appropriate—and certainly kinder—to think of Katai first and foremost not as a sometime romanticist, sometime naturalist, sometime religious writer, but as a lifelong naturocentrist.

英語でこの発表の概要を書いた時、自然主義より花袋の方に重点を置くつもりでしたが、再考の結果、自然主義も——特に「自然主義」という言葉の定義も——大切ではないかと思うように成りましたので、今日の発表では、両方に重きを置きます。

実は、私は文学研究者だけでなく、社会学者でもあります。ですから、私の文学に対しての考え方は、純粹の文学研究者の考え方と少し違っているかも知れません。純粹の文学研究者は、大体、芸術としての文学——つまり、いわゆる「文芸」——を研究しているようですが、私は、勿論、芸術としての価値を認めながら、特に社会上の現象、哲学上の現象としての文学の方に興味を持って居ります。

さて、私の社会学者としての、個人的な考えでは、文学を研究している人は、多くの場合、文学をあいまいな部門に分け過ぎる癖があります。勿論、概説などをまとめるには、これはある程度まで避けられない事と言えるでしょうが、少なくとも、部門に分けると、必ず、その部門やそれに伴う用語に非常に注意しなければなりません。部門や用語をなるべく詳しく、そして正確に説明しておかなければなりません。独断的な、あるいはあいまいな、

あるいは説明なしの例外的な言葉使いなどは、誤解を招くものですから、絶対に避けるべきです。これは常識に過ぎないと思いますが、それにもかかわらず、文学史を考えると、混同や誤解やあいまいな言葉使いの結果、殆ど無意味に成ってしまった部門と言葉が少なくありません。

例えば、「ローマン主義」と言うと、一体何を意味しているのでしょうか。皆さんの連想する事の中では、共通点が多いでしょうが、その全体は必ずしも同じ形に成りません。或る人は自由を、或る人は感情を、或る人は美しい自然を、或る人は勇気や勇者を、或る人は現実からの逃避を、或る人は愛などを連想します。実は、5、6年前、私は日本でも英国でもこの「ローマン主義」の連想についてアンケートをとりました。その結果は多様性に富んでいました。その多様性こそローマン主義の唯一の不変不動の特徴であると言っても良いかも知れません。しかし、そうすると、先程申したように、一体何の意味があるのでしょうか。

「印象主義」もあいまいで、少なくとも三つの別々の意味があります。「客観的」も「主観的」も特にあいまいで、英語の「OBJECTIVE」と「SUBJECTIVE」という言葉と語源的に違っています。「自然主義」は、一番多様な、一番あいまいな言葉であると思いますから、一番注意しなければならない部門です。ヨーロッパでは、少なくとも八つの異なった種類があります。しかし、この種類は皆自然を中心とする思想ですから、「自然主義」と名乗る権利が理論的にあります。それに、翻訳も或る程度問題です。明治の自然主義者は「自然主義」という言葉と「ナチュラリズム」という言葉を同じ意味で使っていましたが、厳格に言えば、日本語の「自然主義」は英語の「NATURALISM」やフランス語の「NATURALISME」とは少し違います。「自然主義」という言葉に「自然科学」の意味が殆ど含まれていないんですから。反面では、同じ理由で、ドイツ語の「NATURALISMUS」に特に似ています。

言うまでもなく、用語や部門がはっきりしない限り、この頃流行っている

弁証法的評論——DIALECTIC CRITICISM——なども無意味になります。研究の便法になるどころか、真実への道を妨害するような、読者を迷わせるようなものになります。

この言葉使いの問題は必ずしも研究者や評論家だけの問題ではなくて、或る作家も自分の作品を部門に分けるのが好きです。花袋も「私は自然主義者である」というようなことをよく言っていました。それは、或る意味では、残念なことだと私は思います。当時の文壇の人々は花袋の使っている「自然主義」という言葉のニュアンスを正しく解釈したかも知れませんが、70年経ってからの今の人々が必ずしもそれを同じように解釈しているかどうかは疑問です。

この発表で評論家と論戦するつもりではないのですが、一つの例証として、つい最近、文化功労者と認められた、あの有名な中村光夫さんを挙げましょう。彼は日本の自然主義に対して——特に花袋と島村抱月の自然主義に対して——ずいぶん軽蔑的な念を抱いています。少なくとも、そういう印象を読者に与えています。中村さんの考えでは、「自然主義」は単にフランスのゾーラの客観的な、科学的な決定論に帰着しているようです。日本の自然主義がそれと違っているのを見て、彼は日本の自然主義を歪んだ、滅茶滅茶になった文学と非難しています。例えば、『田山花袋論』で日本の自然主義の性格を「畸形な性格」と言ったのはよく知られていますし、もっと新しい例として——専門家の本ではありませんけれど——新潮社の『日本文学小辞典』では、次のように言っています。

「わが国の自然主義は、ヨーロッパ文学におけるロマン主義に似た役割を果している。しかし同時にその性格や思想はヨーロッパ、とくにフランスの自然主義思想と多くの共通点を持ちます……（略）……実証主義を奉じたロマンティック文学という矛盾した性格を明らかにした……」

中村さんはヨーロッパの自然主義とローマン主義を黑白のように対立させているだけでなく、ドイツなどの異った自然主義について何も言っていませ

ん。しかし、実は、花袋や抱月が主に手本にした自然主義はゾーラの自然主義ではなくて、ハウプトマンやスーデマンのもっと主観的な、もっと自己中心的な、社会やその伝統からの個人解放を目指していた自然主義でした。中村さんの言うことによると、花袋の文学や抱月の文学観がゾーラの自然主義とルーソーなどのローマン主義を混同したものだそうですが、これは花袋や抱月に対して非常に不公平な評論です。ハウプトマンはちょっと複雑ですが、特にスーデマンについて言えば、彼が代表する自然主義は今の日本でもヨーロッパでも余り名の知られていない文学ですが、ゾーラの自然主義と根本的に違うもので、それに、特に注目すべきことは、日本の自然主義によく似ていることです。ゾーラの考えでは、人間も社会も自然物であった。両方とも自然の中で有機化合物のように進化してきた。この思想は社会学者のオグスト・コムトから得たものです。しかしスーデマンの考えでは、自然物というのは人間に限り、社会やその伝統や習慣などはただ人工的で自然的ではない。従って、スーデマンは、元来自然的人間を拘束する不自然的社会や伝統を攻撃し、個人解放を求めました。別の言い方をすれば、スーデマンの考えでは、人間は社会や伝統から遠ざかれば遠ざかるほど、自由な個人になればなるほど、自然に帰るのです。ニーチェの哲学に影響されたところが多いのです。

言うまでもなく、この種類の自然主義は自由を求めるローマン主義と殆ど同じです。しかし、絶対に見逃がしていけないのは、当時のヨーロッパでは一種の自然主義と考えられていたということです。例えば、スーデマンの劇が、「自然主義の舞台」といわれる「FREIE BÜHNE」（自由劇場）でよく上演されました。それに、先程申したように、自然を中心とする思想ですから、ゾーラのもっと有名な自然主義といくら違っても、「自然主義」と名乗る権利があります。言い換えると、これが示すように、「自然主義」は必ずしも「ローマン主義」の反対ではありません。黒白の違いがないんです。この意味で、島村抱月が「文芸上の自然主義」という作品で次のように言ったように、ワー

ズワースの詩もルーソーの哲学も、自然主義的でもありました。

「吾人は実に明白なる自然主義の端緒をロマンチズムの中に見出す。ルーソー、ワーズワースは自然主義の先達であると同時にロマンチズムの先達である」……

「此の場合に於ける自然主義の意味は単に人間の対照として自然に還り、自然を師とするといふに帰する。」

「人間の対照としての自然」の意味はつまり「人工的でなくて自然的である」ということで、この思想はドイツの自然主義の根底であった「NATURSCHWARMEREI」（自然への帰依）と同じです。皆さんのご存じの事だと思いますが島村抱月はヨーロッパへ行ったことがあります。そこで、ゲーオルグ・ブランデスという人の評論を読みました。ブランデスは『十九世紀の英国に於ける自然主義』という本を書きました。その内容は何だったと思いますか。ゾーラに影響されたジョージ・モアのような自然主義者であると思えば、大間違いです。その本の中で扱われている自然主義者は自然の美しさを讃美するワーズワースとそのほかの詩人だけです。

実を言うと、ドイツだけでも少なくとも四つの種類の自然主義がありました。決定論的自然主義もその中にありましたが、一つの種類に過ぎませんでした。重ねて言いますが、花袋は、或る程度まで、特に露骨なる描写の点で、ゾーラに影響されたのは事実ですが、思想の点では、主に手本にした自然主義はスーデマンなどの「自然を尊重する、社会やその伝統を攻撃する、個人解放を目指す」という種類の自然主義でした。花袋の当時の評論を読めれば、これがはっきり分かると思います。1902年の『重右衛門の最後』という小説にもはっきり見えます。少し引用いたします。

「6000年来の歴史、習慣。これが第二の自然を作るに於て、非常に有力である。社会はこの歴史を有するが為めに、時によく自然を屈服し、よく自然を潤色する。けれど自然は果して6000年の歴史の前に永久に降伏し終るであろうか。或は謂ふかも知れぬ。これ自然の屈伏にあらず、これ自然の改良で

あると。けれど人間は浅薄なる智と、薄弱なる意とを以て、如何なるところにまで自然を改良し得たりとするか。神あり、理想あり、然れどもこれ皆自然より小なり。主義あり、空想あり、然れどもこれ皆自然より大ならず。」

ですから、なぜ中村さんはこれを殆ど無視しているのでしょうか。実は、別の本でニーチェからの影響に少し言及していますが、自然主義として扱っていません。或は、ドイツの自然主義者の名前を口にしても、ゾーラのような自然主義者として扱っています。中村さんにとっては、自然主義と言えば、やはりゾーラの決定論に限るようです。フランス文学だけ勉強したせいでしょうか。

ともかくも、この例証が示すように、特に自然主義やローマン主義のような大規模な主義の場合に、どこまでも自分の狭義の解釈、或は一番月並の解釈だけに拘泥するのは妥当ではありません。

こういう訳で、私は、花袋の文学を考えると、主義を考慮するより、その文学の個性を発揮する元素を探り当てようとし、そしてその元素の発展をたどろうとし、花袋が社会の中で、自然の中で生活している人間だということをいつも念頭に置きながら彼の文学を理解しようとし、

結局、花袋の文学の一番根本的な元素は「自然」であると思われます。彼は一生の間、自然から遠ざかることが出来ませんでした。彼の文学に男女関係や社会問題や個人問題などがよく出ますが、彼自身言ったように、全ては、究極のところ、自然に立脚し、自然に由来するものです。

しかし、「自然主義」という言葉と同じように、注意しないと、「自然」という言葉も問題になるでしょう。若い頃の花袋の文学に現われる「自然」は晩年の文学の「自然」と必ずしも同じものではないのですから。ごく大ざっぱに、花袋の文学に現われる自然像の発展や変化をたどってみましょう。

若い頃に、花袋が抱いた自然のイメージは非常にシンプルなもので、田舎で見るような、美しい、大体具体的なものでした。或る意味では、惨い運命の反対だったと言ってもいいでしょう。つまり、若い花袋の考えでは、運命

は人間を悩ますものであるのに対して、自然は人間を慰めるものであった。黒白のナイーブな考え方で、「文学界」に出した短篇などでよく見るものです。例えば、自分をモデルにした若い主人公が失恋して、運命を嘆きながら、美しい自然に慰めを求めます。これは若い花袋の短篇の典型的な概略です。

しかし、明治30年代にはいって、ゾーラなどの影響を受けると、花袋の抱いた自然像はもっと複雑になって、醜悪をも含める、半分抽象的なものと成りました。特に1901年に、モーパッサンとニーチェとスーデマンからの影響を受けると、自然を非常に力強い、善悪を越えるような、原形的なものと考えようになりました。この時の態度は、既に引用した『重右衛門の最後』に代表されています。結局、ニーチェの「URNATUR」（原形的自然、社会以前の自然）の反映と言えるでしょう。

1904年に、流血の巷であった日露戦争に行ってから、花袋の自然像はますますおそろしいものになりました。人間の生と死を無情に支配する、畏怖の念や畏敬の念を起こさせるようなものに成りました。運命と同じもの、同じ力に帰着しました。ニーチェなどの影響で花袋は、一方では、社会や伝統と戦っていましたが、もっと深いレベルで、今、一種の敵になつたらしい自然に対しても疑いを抱くようになりました。この態度は『蒲団』にも見えます。例えば、芳子さんのボーイフレンドのことを知ってから、時雄は酔いながらこう思います。

「行く水の流れ、咲く花の凋落、この自然の底にわだかまれる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほどはかない情けないものはない。」

翌年の『一兵卒』という短篇にもはっきり見えます。例えば、死にかかっている、踴っている一兵卒を描く場面では、花袋はこう書いています。

「『苦しい！苦しい！苦しい！』としばらくしてまた叫んだ。強烈なる生存の力ももうよほど衰えてしまった。意識的に救助を求めると言うよりは、今はほとんど夢中である。自然力に襲われた木の葉のそよぎ、浪の叫び、人間の悲鳴！」

2、3年経つと、花袋の抱いた自然像は、今一度変わりました。今度の自然は、社会をも含めるもので、人間の生殖を促進するため、人間の性的本能や群居本能などを利用して社会を作った力でした。結婚も、愛そのものも、皆ただ生殖のための、自然の業に過ぎないと思うようになりました。花袋は、これを「<sup>わな</sup>罨」と言っていました。『罨』という短篇と『妻』と『縁』という小説などに見えます。この自然は、『或る死』とか『線路』などのような短篇が示すように、時に、罪のない子供も<sup>むざん</sup>無慙に殺します。反面では、時に、この同じ自然は人間に美しさと慰めを提供します。つまり、場合によってやさしい友達になったり惨い敵になったりします。

このパラドックスを解こうとして花袋は宗教に向かいました。宗教に転向したヒースマンというフランスの作家からの影響も受けました。数年の苦勞の結果、花袋は、自然がすなわち万能の神様みたいな力であるという信念に到達しました。人間だけでなく、生活の流れも、時の流れも、宇宙の全ての物を支配する神秘的な力である。人間は、ただ、時の流れで生まれて、生活して、生殖の役を果たして、死んでしまうのです。生殖以外の目的があれば、それは人間に分かるものではない。人間は、何も分からなくてもその身を自然の流れに任せるよりほかはないというような諦観に到達しました。1923年の『近代の小説』という作品では、花袋はこう言いました。

「自然は例の仏教の真如、如来、如来蔵などということと同じだ。それに逆らへばすぐその影響を受けるよ。だから、無理は出来ないよ。」

この自然像は、結局、最大の、最終の自然像と言ってもいいでしょう。無限ですから。

さて、以上申し述べた通り、花袋は単にゾーラみたいな決定論的自然主義者ではなかったのです(実を言うと、ゾーラもそんなに簡単な作者ではなかったが、それは別の話です)。そして、中村光夫さんのように、花袋を「決定論者失格」というような部門に分けないで下さい。どうしても、部門に分ける必要があれば、ゾーラ of 自然主義との混同を避けるため、少なくとも、より

詳しい「自然中心主義者」か「自然崇拜者」というような言葉を使って下さい。しかし、出来れば、部門を使わなかった方がいいと思って居ります。

## 討議要旨

Winkelhoferova 氏より、「用語の内容を厳密に考えるべきである」という発表者の提言に賛成の旨の発言があり、「自然主義」の語には、フランスのナトラリズム (Naturalisme) とドイツのナトラリスムス (Naturalismus) の混乱が見られるので、「日本の自然主義」とでも言うことにしたらよいのではないかとの発言があった。

発表者から、片岡良一氏のいう「徹底自然主義」ということばはゾーラの決定論よりドイツ印象主義的な自然主義に近いので、あまり用いられないのは残念であるとの発言があった。Melanowicz 氏より、自然主義といっても各国でその内容に相違があり、更にその言葉に美学範疇としての面と文学史上の時代としての名前という二つの面があり、用語の使い方に注意すべきであるという発表者の意見に賛成である。また個々の作品について小説家がどう深く探ったかが問題であるとの発言があり、発表者より、自然主義といわれる人達の中にもそれぞれの作家の個性があることを念頭に置くべきであるとの発言がなされた。